「相中相高百年史」より

（ 戦時体制下の相馬中学校　１７）

１０　学徒動員：三年生（ 相中第４５・４６期生等 ）・・・ペンをハンマーに

《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

（６）九死に一生を得て（その２）

筆者 (※1) の私ごとになるが、終戦後（昭和 22 年４月）、常陸多賀にある多賀工専（現茨城大学工学部）に入学することになった。その宿舎吼洋（こうよう）寮に行ったとき、寮のあっちこっちにえぐられたような艦砲射撃の跡を見せられ、愕然とした記憶がある。この寮は、日立からたしか５㎞も離れていた。にもかかわらず、日立から常陸多賀までの工場という工場は軒並み艦砲射撃をうけ、寮付近もそのとばっちりをうけたことになる。しかも、多賀工専の早川校長の官舎に砲弾が炸裂、校長は鉄兜を被りゲートル姿のまま倒れておられ、しかも一家全滅であった。他に職員一名、学生十四名が犠牲になっている。ときに 1945（昭 20）年七月十七日深夜の出来事である。それは丁度生駒浩達十名を乗せた、例の常磐線の列車がストップしていた時刻であった。不思議な気がする。そして二日後の七月十九日日立市は焼夷弾攻撃を受け、ほとんど全市が焦土と化してしまったという。日本中の至るところが悲惨な目にあっていたことになる。

また**塩沼俊隆** (※2) の場合は、こんな様子であった。

「おーい、まだか！」

その日六月十日は夜勤明け、塩沼が勤務を終えて工場の朝風呂入っているところに、前述の南原が声を掛けてくれた。職場は別だったが、帰り際によく回ってくれたもので、菊地も一緒だったようだ。

「すぐあがっから、ゆっくり行ってて……」

鍛錬工場の夜勤は、少年にとって過酷この上もなかった。塩沼は真っ黒に焼けた顔や手足をすばやく洗い流し、金沢八景まで足早に南原たちの姿を追い求めたのだったが、ついに追い付けぬまま富岡寮に帰った。そして、いつもの煎餅布団にもぐり込んだ。

それから、どれくらい経ったろうか、空襲警報のサイレンが鳴った。普段だったら押し入れに隠れて、ずる寝していたのだが、何か兆候を感じたのか、その日に限って素直に近くの防空壕に急いだのだった。

「ザーッ……」

という砂でも撒くような音に、何だろうと思わず壕の外に飛び出して空を見上げた途端、凄まじい爆裂音と爆風で傍の堀に吹っ飛ばされて気を失った

寝ている時、確かにおふくろの声がし、呼び起こされたのだ。不思議なことだと今も忘れず大事に胸に納めている。

どれだけの時間倒れていたかわからないが、ハッと気がついた。全身泥まみれだが、幸い怪我はなかった。起き上がって見ると、壕のすぐ近くに大きなすり鉢型の穴がポッカリあいて、壕の中やその周りには何人かの怪我人が倒れていた。直撃を受けた寮はメチャメチャで、退避してなかったらどうなっていたかと思うと、ゾーッとした。

その日の空襲で菊地・南原が爆死、と聞かされたがとても信じられなかった。自分より一足早く帰ったと思っていたのに、富岡駅付近で……とは？、ほどなく、痛ましい両君の亡骸（なきがら）が確認されたと知らされ目の前が真っ暗になった。その日は自分も加わり同行三人になるところだった。

無情の嵐の吹き荒ぶ運命の峠に身を竦（すく）める心境。ただ涙で手を合わすしか、なすすべはなかった。臑齧（すねかじ）りの味も忘れ、いつか親となり舐犢（しとく）の愛（親牛が子牛をなめてかわいがる）を知るにつけ、両君のご両親の嘆きはいかばかりであったろうと思うと、涙を禁じ得ない。その日、六月十日の白昼の大惨事を思い浮かべ、彼等の冥福を祈ること五十星霜。生を長らえ老境に入ろうとしている今も、爆撃や機銃掃射の夢幻に、安眠妨害をうけることもしばしば、爆風洗礼のおののきから解放されないでいる。

「死生命あり」といえど、我が人生の歳時を綴れ織りするなかで、無念極まりない、この哀史が一際大きく項（うなじ）を埋めているのである。（原文のまま引用）

（※１）熊耳　敏　中第46回　昭和22年卒　大甕出身

（※２）中第45回　昭和21年卒　丸森町出身

（転記　7月17日）